

第五惑星アスカ②

あお

碧い凶星

六道 慧



富士見ファンタジア文庫

イラスト



富士見ファンタジア文庫

だいごわくせい
第五惑星アスカ②

あお きようせい
碧い凶星

平成元年8月25日 初版発行

著者——^{りくどう}六道 ^{けい}慧

発行者——中井茂雄

発行所——株式会社富士見書房
〒102 東京都千代田区富士見1-12-14
電話 03(261)5375(代表)
振替 東京7-86044

印刷所——旭印刷

製本所——多摩文庫

落丁乱丁本はおとりかえいたします
定価はカバーに明記してあります

©Fujimishobo 1989, printed in Japan
ISBN4-8291-2326-5 C0193

第五惑星アスカ②

あお

碧い凶星

26



富士見ファンタジア文庫

10-3

絵・本文イラスト 高田明美

目次

第一章	エクサイル（流浪 ^{るろう} ）	5
第二章	デンジャラス・ゾーン	52
第三章	銀のESP ^{エスプ}	99
第四章	吹き溜まり ^{ふだまり}	147
第五章	人間兵器	183
あとがき		243

第一章 エクサイル（流浪）

シド……。

私を助けて……シド。

明日香^{あすか}はシドを呼んだ。片時も忘れたことのない、愛^{いと}しい人。永遠の「愛夢^{アムール}」。地球へ来てからも、彼への想い^{おも}を消すことはできなかった。

何度も何度も繰り返す、終わりのない夢。明日香の意識は、夢幻^{むげん}の時の中を彷徨^{さまよ}っていた。

長い暗闇^{くらやみ}、トンネルのような闇を抜^ぬけると、いきなり眼前に広大な空間が開けた。地平線の果てまで、大草原^{バシバ}が広がっている。燃える太陽がほとんどまっすぐに沈^{しず}んでいった。

たちまちのうちに空には薄闇うすやみがおりてくる。険峻けんしゅんなアンデス山脈から水晶のような月が昇り、南国の紫色の夜空を照らし出して、大草原の蒼白あおしろい広がりかがやを輝かせる。

ここは……明日香は空中からその壮大な光景を眺めていた。

南米ペルー。パルパとナスカの下降斜面に描かれた巨大な地上絵。ハチドリ、サル、クモ、螺旋らせん、入り組んだ幾何学模様。道のような印象を与える、直線、折れ線、平行線、接線。そしてしばしば繰り返し、繋がったジグザグ線、波動形。

それらは、この地球に来てからずっと、明日香が描き続けてきたものだった。ヴィマナのレーザーを利用し、浅浮き彫りの溝を、この砂漠地帯に描いたのである。

シド・レイ・ゴデイスのメッセージに従って。

(アスカ)

と、どこからかシドの声がした。明日香は彼の姿を、地上に認めた。漁の女神である月の化身、グンカンチヨウの巨大な絵の上に彼は立っていた。長い銀髪が風に揺れ、月の光を浴びてきらきらと煌きらめいている。

「シド」

アスカはつぶやき、彼のもとへと降りた。

そうよ、シドがいる。あの腕の中へ飛びこめばいいのだ。何も恐れることはない。彼が

わたしを護^{まも}ってくれる。

「アスカ」

シドは、明日香の身体^{からだ}を優しく抱^だきしめた。変わることもない愛に満ちた抱擁^{ほうよう}、耳に心地良いささやき。やわらかな銀色のマントが、明日香をそっと包みこんだ。

「この地上絵は、再生の曼陀羅^{まんだら}だ」

と、シドは言った。

「再生の曼陀羅？ それはどういう意味なの、シド」

明日香は彼を見上げて、問いかけた。銀色の瞳^{ひとみ}を間近に見て、心が慄^{おそ}えた。

「起源、再生、そして無限。それらがこの絵の中に織りこまれている。指標であり道標でもあるが……これを使ってはいけない。使わない方向に運命を動かすんだ」

「運命を動かすなんて……そんなこと、わたしにはできないわ」

明日香は小さく首を振^ふった。子供のように怯^{おそ}えた目をしていた。

「ああ、アスカ」

シドは抱きしめる腕に力をこめた。

「なぜ、運命が君を選んだのか、わたしにはわからない。しかし、もう動き始めてしまった。ゆがんだ時^{とき}を戻^{もど}せるのは君しかない」

「シド……」

理解できないシドの苦悩が、明日香の心に伝わってきた。愛する娘を案じる、哀しい心の波。時が戻せるものならば……。

「わたしはいつでも君のそばにいるよ、アスカ。『アムール』とともに」

突然、明日香を抱いていた腕が離れた。

たまらなく心細い気持ちになる。世界中にたったひとり、とり残されたような孤独感、自分のそばには誰もいない。

「シド」

明日香はうろたえて、辺りを見まわした。彼はいなかった。幻のように消えてしまっていた。

薄紫色の空に、銀色の鳥が飛んでいた。明日香の頭上を旋回し、空の彼方へと飛んで行く。

「シド！」

明日香は鳥を追って大草原を走った。

行っではいや！ わたしを置いていかないで、シド。一緒に連れて行って。

いつのまにか、周囲は濃い闇に覆われていた。何も見えない。泥濘のような暗闇の中を、

明日香は夢中で走り続けていた。

二

眩しい光。

暗闇の中で、なにかが光っていた。それが眩しくて、明日香は目を閉じた。自分の周りに人の動く気配があった。

目を開けようとしたが、瞼が重くて持ちあがらない。しかし、目をつぶっていても、眩しい光が感じられた。ライトが照射されているような不愉快な感覚。

少しずつ記憶が甦ってくる。殺されてしまった毬絵と純。怒り狂った明日香は、諏翁を追ってテレポートした。さらに、ローター機の中へ。そこでカニングラムとトニーに会った。一瞬の隙について飛んだナイフが、明日香の胸をつらぬいた……。

身体機能は、まだ完全に回復していなかった。仮死状態からゆっくり正常体へ……明日香の凍結命令に従った細胞が、目覚め始めていた。

明日香は動こうともがいたが、駄目だった。身体ががっしりと固定されていた。動かない。

「素晴らしい」

と、頭上で男の声がした。

「見たまえ。体温を下げ、血の流出を防ぎ、仮死状態となり機能の回復を計る。この傷の治りの早さはどうだ。まだ六時間しか経過していないというのに、もう傷口には肉が盛り上がっている。目の前で見ていても信じられんよ。まさに奇跡だ」
興奮気味だった。声がうわずっている。

「はい。博士のおっしゃるとおりです。わたくしも信じられません」

女の声が、後に続いた。やはり興奮しているように感じられた。

「超能力者は何人もテストしてきましたが、こんな例は見たことがありません。この驚異的な治癒力も、やはりメタ能力の一種でしょうか、ヘイグ博士」

「おそらく、そうだろう。もし、この原理が解明できれば、世界中の学者が目を剥くのは間違いない。不死だぞ、ミス・タムラ。過去から夢みてきたことが現実になる。人間は不死を手に入れることができるのだ」

何人かの声が、明日香の身体について、次々に意見を述べた。格好の実験体を見つけて嬉々としていた。大きな声でがなりたてる。

「髪が、髪の色が……」

甲高い女の声が、おろおろと明日香の変化を指摘した。

おお、と、どよめきがあがった。髪の色が変わっていったのである。黒から茶色、赤毛、金、最後に銀色……めまぐるしく変化した。

「凄い」

男が唸るようにつぶやき、やおら、明日香の臉をこじあげた。いきなり強烈な光が射しこんで、明日香の視界はまっ白に染まった。

「目の色も変わっているぞ！ 青に変化している」

凄い、奇跡だ、素晴らしい……呆けたように同じ言葉を繰り返す、マッド・サイエンティストの顔を、明日香はぼんやり確認できた。無理やり開けられたお陰で、目が少し見えってきた。

手術室のような感じの、白い部屋の中だった。消毒液の匂いがぷんと鼻をつく。

白衣を着た男が三人と女が一人。壁の近くにエドワード・カニングムが見えた。そして、その隣にはトニイ・ライリー。

トニイ。ああ、なぜ助けしてくれないの。なぜ、こんな連中に私の身体を触らせるの。トニイ、早く助けて……明日香は目に光を集めて訴えた。

だが、トニイは動かなかった。サンダラスのせいで表情が読めない。どこを見ているのかもわからなかった。

明日香の身体は、思っていた通り、ベルトで固定されていた。斜めになった金属製の椅子に縛りつけられている。裸同然の姿だったが、美しいヌードに興味を持つような人間はいなかった。実験動物としか思っていないのだろう。

「騒がたてるのはそれぐらいにして、仕事にかかってもらおうか。彼女はとくに意識を取り戻している。Gから指示されているものをつける。危険だ」

カニングガムが言った。あくまでも冷静だった。薄青の瞳は、凍てついた氷の湖を思わせた。何事にも動じない、鉄の意志の持ち主だ。

「おお、そうだ、ヘゼノンの輪。あれをはめておかないと大変なことになる。テレポートされてしまったら、おしまいだ」

頭の禿げた、年かきの男が言った。たぶん、ヘイグ博士だろう。天才と紙一重という雰囲気漂わせた男だった。研究のためとあらば、ためらわず人体実験を行うだろう。だから今、ここにいるのかもしれない。

「パニシメントを」

と、ヘイグは命じた。

ミス・タムラが小さな銀色の銃のようなものを持ってきた。かさかさした潤いのない肌をした、中年の女だ。博士にそれを渡す。



「恐いかね？ 大丈夫だ。別に痛くない」

博士は、明日香の額にパニシメントを当てた。シュツと音がして、明日香の額に二センチほどの幅の、銀色の輪がはまっていた。どこにも継ぎ目のない、不思議な物質である。とたんに、明日香はひどい頭痛に襲われた。ずうんと頭が重くなる。不快な痛みが全身に広がっていくようだった。

「孫悟空の輪だよ、お嬢さん。少しの間、頭痛がするかもしれないが、なに、すぐに治まる。不思議なものでな。馴れてくるのだよ、人間の身体というやつはな。特にあんたは順応するのが早い。じきに痛みは感じなくなる」

ヘイグは顔を近づけて、ささやいた。近くで見ると、その狂気度がいつそうはつきりした。目の色が普通ではない。

「よし、自白剤の用意だ。ヒオスシミンを投与する」

ヘイグは威厳に満ちた声で命じた。

自白剤ですって？

明日香は心の中でせせら笑った。麻酔やドラッグはいくら打つてもきかなかった。人体に有害なものが身体の中に入ると、自然に分解されてしまう。放射能さえも、明日香の身体にはなんの害も及ぼさなかった。

どうせだから、きいたふりをして、体力の回復を計ろうと思った。その後でテレポートすればいい。簡単だ。

左の二の腕がひやりとし、次いでちくりと痛んだ。五秒たち、十秒が過ぎた。のんびりと構えていた明日香は、突如、身体の変に気づいた。

心臓の鼓動が異様に早くなり、冷汗が噴き出してきたのである。初めて経験する、感覚だった。

クスリがきいている？ まさか、そんな……頭が朦朧としてきた。周囲の音が遠ざかったり近づいたりしている。意識が夢の中に沈みかけていた。

「記憶再生装置の準備だ」

「はい」

博士たちが忙しく、動き出した。ミス・タムラが明日香の両手首に、電極のついたベルトを巻きつける。

記憶再生装置。そんなもの、まだ地球では作られていないはず。この連中の後ろにいるのは、いったい誰なのか……。

けんめいに正気を保とうとしたが、駄目だった。自然に上瞼が垂れ下がってくる。泥の中へ際限なく沈みこんでいくような、不快な睡さだった。心地よい眠気ではない。